

松下幸之助記念志財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

河 珠彦

## 【所属】(助成決定時)

東京大学

## 【研究題目】

サイト・スペシフィック・アートの理論モデルの構築

## 【研究の目的】(400字程度)

サイト・スペシフィック (site-specific) とは、特定の場所 (= サイト) の性質を活かして制作・企画され、当の場所と相互関係をもつ芸術実践の性質を指す。当初は場所と物理的に不可分である作品を指す用語であったが、最近では、場所に潜む政治・社会問題に焦点をあてるプロジェクト型の芸術実践も主流になりつつある。このような状況を受けて理論においても「サイト・スペシフィック」という概念を捉え直す試みが見られるが、近年の実践が政治・社会問題に関心を向ける点を重視するあまり、サイト・スペシフィックな芸術実践の中心要素であるはずの現実の場所がもはや議論から排除されることがある。その結果、近年の実践はそれが政治・社会問題の解決にどの程度寄与したかという倫理的観点からもつぱら評価される傾向にあり、作品が現実の場所とどのように結びつき、それによっていかなる芸術的性質を有しているかについての議論が不足している。そこで本研究は、サイト・スペシフィックな芸術実践を改めて現実の場所との関係から捉え直し、そこから生じる作品の芸術的性質について適切に論じることを可能にするような理論モデルの構築を目指す。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

サイト・スペシフィック・アートに関する従来の議論は現実の場所について、固定性／移動性や持続性／一時性といった二項対立的な枠組みを用いて論じてきた。だがこうした二項対立的な枠組みは、場所との関係が流動的で移動性を有する最近の芸術実践を捉える上では十分ではない。そこで本研究では、地理学の理論の中で「関係的場所」に関する議論(場所を、外部と関係しながら常に形成されつつあるものとして理解する議論)を援用して、特に従来の議論で本質主義的であると批判されていた特定の場所での固定性について再考し、場所そのものを常に変化に開かれているものとして理解することで従来の議論を補おうとした。

以上を踏まえ、本研究ではサイト・スペシフィック・アートについて考察するための新たな軸として①時間、②場所のネットワーク性の二つを想定している。まず①について、サイト・スペシフィック・アートの持続性／一時性に関する考察を行なった。つまり場所そのものが常に変化しているなら、場所と相互関係をもつ作品もまた(仮に永久に設置されたものでも)変化に開かれていると捉えることができ、かつその変化は芸術家の意図を超え出るものでありうる。次にサイト・スペシフィック・アートにおける場所のネットワーク性について考察した。場所は常にその外部に対して開かれているため、特定の場所と結びつけられている作品でも、その特定の場所を超えて他の様々な場所とも関係をもちうる。すなわち、作品を通じて複数の場所にまたがるネットワークが形成されるのである。

以上の考察は基本的にサイト・スペシフィック・アートおよび場所という概念に関する文献の調査に基づいているが、ケース・スタディを行うための現地調査も実施した。具体的には北海道の札幌国際芸術祭および香川県の直島(瀬戸内国際芸術祭の開催地)を助成期間中に訪問し、日本におけるサイト・スペシフィック・アートの現場も視野に入れた研究を遂行した。

【結論・考察】（４００字程度）

ある場所と緊密な関係を結ぶ芸術作品の性質を指す「サイト・スペシフィック／スペシフィシティ」は、芸術実践の変遷とともに、概念そのものは今や多少古いものとみなされることが多い。先行研究の論者たちが物理的側面にこだわりつつ特定の場所に固定されているような「サイト」概念から脱し、いわば非物質化され、場所以外の要素を含むものとして「サイト」を想像しなおしているのも、そのような理由によるだろう。しかしながら場所と緊密に結びつく芸術実践は依然として多く制作されており、特に地域アートが活発に企画されている日本ではこれからも絶えず登場してくるだろう。そのような状況の中で、特定の場所にこだわることを例えば本質主義的・反動的といって退けるのではなく、場所そのものの理解を捉え返すことによって、特定の場所と緊密に結びつく芸術実践から新たな意味を見出せるのである。